

## カントにおける学問の理念（続篇）

鈴木 文孝

拙論「カントにおける学問の理念」（『愛知教育大学研究報告』、第二十四輯、人文科学編、所載。以下、「正篇」という）は、私のカント研究の「序論」としての意味を持つものであった。とりわけ、その執筆作業を通して『純粹理性批判』の「超越論的理念」論の真理論的意味を私なりに把握し得たことは、私のカント解釈に重要な方向付けを与えてくれた得難い成果であった。正篇においては、私は、カントの論述に即して、カントにおける学問の理念を明らかにしよう努めた。本稿は、私のカント解釈の、言わば「結論」としての意味を持つものである。一人の哲学者の哲学・倫理学を理解するためには先ずその哲学者の学問観を正しく理解しておくことが必要であるという私の考えは、今も変わっていない。本稿においては、カントの論述の解釈を通して、カント哲学においては、カント自身にも明確には意識されていない『自覚の形而上学』という学問の理念が成

立していることを明らかにし、かつ「自覚」の諸様態について比較精神的に考察し、さらに『自覚の形而上学』の哲学的意味を解明し、それを踏まえて、カント倫理学の学問性について若干、批判的吟味を加えてみたい。したがって、本稿は、独立の論稿としてお読みいただいてよいものである。

### 一 自覚の形而上学の成立

『純粹理性批判』の「純粹理性の誤謬推理について」の章（以下、「誤謬推理論」と記す）において、カントは、伝統的形而上学すなわちライプニッツ・ヴォルフ学派の形而上学の一部門である合理的心理学を論駁している。誤謬推理論での論述は、最初から最後まで、合理的心理学を論駁することに充てられている。カントの記述に従って定義すれば、「合理的心理学」とは、純粹統覚「我思う」を「唯一のテキスト」にして心靈の不死

性を証明することを企図する学問である。誤謬推理論においては、「合理的心理学」には「純粹心理学」又は「超越論的心理学」という名称も充てられている。（「純粹理性批判」、第一版）

誤謬推理論は、「純粹理性批判」、第二版においては、全面的に改稿されている。第二版においては、純粹統覚「我考う」は

——私の用語を用いて言えば——《純粹意識の論理形式》にすぎないものであり、単にその《純粹意識の論理形式》を分析することによって超越論的自我を認識対象として認識することは不可能であるゆえ、合理的心理学は——合理的宇宙論及び合理的神学と同様——学問としては成立し得ないという形で、合理的心理学の論駁がなされている。それに比し、第一版においては、合理的心理学においてなされてきた発想そのものを踏まえて、合理的心理学を構成する理性推理（三段論法）を、カント自身の立場から、すなわち彼の「超越論的理念」論に則り体系的に構成・定式化し、それらの理性推理の凡てが「誤謬推理」であることを解明し、それによって合理的心理学を論駁している。ちなみに、私なりに言葉を補って、カントが定式化している、合理的心理学の理性推理をここに記しておく。

一 実体性の誤謬推理 「その表象が我々の判断の絶対的主語であり、したがって他の物の規定としては使用され得ないところのものは、実体である。思惟する存在者としての私は私の凡ての可能的判断の絶対的主語であり、私自身についてのこの表象は、何か或る他の物の述語としては用いられ得ない。ゆえに、思惟する存在者としての私（心靈）

は実体である。」<sup>(1)</sup>

二 單純性の誤謬推理 「その働きが決して多くの働く物の共同作用と見なされ得ないところの物は、單純である。さて、心靈あるいは思惟する自我はかかる物である。ゆえに、心靈は單純である。」<sup>(2)</sup>

三 人格性の誤謬推理 「相異なる時間における己自身の数的自同性を意識しているところのものは、その限り人格である。さて、心靈はそれを意識している。ゆえに、心靈は人格である。」<sup>(3)</sup>

四 外的關係の觀念性の誤謬推理 「その現存在が單に所与の知覚に対する原因としてのみ推論され得ることのもの、それは、全く疑わしい存在を有する。さて、凡ての外的現象は、その現存在が直接には知覚され得ず、所与の知覚の原因としてのみ推論され得るような種類のものである。ゆえに、外官の凡ての対象の現存在は疑わしい。」<sup>(4)</sup>

これらの理性推理がいかなる点で「誤謬推理」であるのかについては、カントの論述を見られたい。

「觀念論論駁」は、第二版では、「超越論的分析論」においてなされている。したがって、「超越論的心理学の第四の誤謬推理」についての批判・論駁は、第二版では、誤謬推理論における課題とはされていない。また、第二版における「觀念論論駁」の仕方は、第一版における「第四の誤謬推理」についての批判・論駁の仕方とは異なった視角からなされている。しかし、「実体性の誤謬推理」、「單純性の誤謬推理」、「人格性の誤謬推

理」に関する限り、それらを批判・論駁する論拠は、第一版においても第二版においても、本質的には同じものである、と見なしてよいであろう。誤謬推理論の論述がなぜ第二版においては全面的に書き改められたのかについて断定することは、困難である。単なる推測ではないが、「超越論的分析論」の改稿によって、第二版においては、純粹統覚「我考う」が《純粹意識の論理形式》であることが、「超越論的分析論」によって明確化されているということが、誤謬推理論の改稿の契機を成したのではないかと、私は考えている。例えば、右に引用した「純粹理性性の誤謬推理」の諸定式においては、「思惟する自我」（超越論的自我）と「心靈」とが相異なる概念であることは、全く顧慮されていない。「思惟する自我」とは、純粹統覚我のことであり、「心靈」という概念が指意するものではないのであるが、注目すべきことは、第一版においてカントは「思惟する自我」（超越論的自我）を、それを「心靈」と同一視している限りにおいては、実体的論的に観念しているということである。そして、合理的心理学そのものの論駁に取り組むカントの姿は、第一版における論述の中に——第二版における論述の中においてよりも——よりはっきりと現れている。したがって、ここでは、第一版における論述に即して論を展開する。

純粹統覚「我考う」が《純粹意識の論理形式》であることは確かであるが、それは、それぞれの超越論的自我「純粹統覚我の（純粹意識の論理形式）である。カントは純粹統覚「我考う」を「ich denke（とは書き表やない）」Ich denke（と書き表す。

そこには、超越論的自我「純粹統覚我についてのカント自身の理解の仕方が反映しているように、私には思われる。超越論的自我「純粹統覚我は、具体的には、それぞれの実在的人格の超越論的主観（主体）として在る。超越論的自我「純粹統覚我的存在を離れては、純粹統覚「我考う」という意識——別の用語でいえば、「意識一般」——は成立し得ない。デカルトの「我思う。ゆえに、我在り」という命題は、それ自体としては真理を表しているのである。（だからといって、その「我」を「思惟実体」として把握することは誤りである。）超越論的自我「純粹統覚我は、實在論的に把握されるべき実在的自我なのである。超越論的自我「純粹統覚我は、決して《自我一般》ではない。だから、カントは、純粹統覚を《Ich denke（と定式化しているのである。

「超越論的理念」論に則して見れば、合理的心理学が「実体」、「単純性」、「数的自同性」という範疇——名称それ自体は、「純粹理性批判」の範疇表における名称と必ずしも同一ではないが——によって超越論的自我「純粹統覚我を規定しようとするゆえんは、明らかである。というのも、純粹理性性の超越論的機能に基づいて「自然素質としての形而上学」は成立し得るのであり、その一部門としての「自然素質としての」合理的心理学も成立可能であるのだから。純粹理性性は、「絶対的統一性」を表す諸範疇<sup>①</sup>でもって超越論的自我「純粹統覚我を、換言すれば超越論的主体（主観）を規定しようとするのである。カント自身は明言していないが、「自然素質としての形而上学」が伝統

的形而上学を形成してきたのであり、合理的心理学、合理的宇宙論、合理的神学は「学問としての形而上学」としては成立し得ないが、「自然素質としての形而上学」としては成立し得るものであることが、「超越論的弁証論」の論述の全体を通して解明されているのである。その「自然素質としての形而上学」の一部門である合理的心理学を、我々は《自覚の形而上学》と規定することができるであろう。カント自身によつては明確には意識されていないが、誤謬推理論においては、《自覚の形而上学》という学問の理念が成立しているのである。

正篇においては、私のカント研究における主たる関心が「人格と共同の問題」に向けられていることを断つておいた。「人格の」共同については、日本カント協会第十三回学会特別報告「共同態の倫理学」において主題的に論及した。その特別報告と同じ内容の研究発表は当研究会においても行なつたので、本稿では、特に、「人格」について論及するために、《自覚の形而上学》という学問の理念の成立に注目するわけである。（当研究会における研究発表は、一九八九年三月二十七日に行なわれた。司会を務めてくださったのは、熊田健二先生である。）

誤謬推理論において潜在的に成立している《自覚の形而上学》においては、実在的人格は己の超越論的自我に超越論的主観主体を、「実体（的なもの）」、「単純な（もの）」、「自己意識における「数的自同性」を具えたもの、として自覚するのである。ここでは、その《自覚の形而上学》においては、超越論的主体の（倫理学的意味での）相互主体性の自覚については全く顧慮

されていないことを、指摘しておく。

## 二 「自覚」ということ

笠は長途の雨にはころび、紙子は泊り泊りの嵐に揉めたり。侘びつくしたる侘人、我さへあはれに覚えける。昔、狂歌の才士、この国に辿りしことを不図思ひ出でて申し侍る

狂句木枯の身は竹斎に似たる哉

「蕉風樹立の第一声『冬の日』の巻頭句」である。「侘びつくしたる侘人、我さへあはれに覚えける。」——松尾芭蕉の、己の審美的自覚を端的に表している言葉である。竹斎の物語を思い浮かべながら、芭蕉は、「狂句木枯しの身は竹斎に似たるかな」と、「名古屋に入る道のほど諷吟す」るのである。彼は己を、審美的求道としての行脚の行程で、「侘びつくしたる侘人」として自覚している。更に行脚を繰り返して風雅の極致を究めるに至つた段階においては、彼は己を薦を着た旅人になぞらえている。

### 元禄三、元旦

都近きあたりに年を迎へて

薦を来て誰人います花の春

芭蕉は、西行法師の生き方こそが審美的求道者の本来的在り方であると考えるに至つている。元禄三年四月十日付「此筋・千川宛書簡」において、この句作について言う。「五百年來昔、

西行の『撰集抄』に多くの乞食をあげられ候。愚眼ゆゑよき人見付けざる悲しさに、再び西上人をおもひかへしたるまでに御座候。』そして、元禄五年二月の「栖去の弁」の末尾に言う。「なし得たり、風情つひに薦をかぶらんとは。」

もちろん、カントも、人間の「自覚」には様々な様態があることを認めている。倫理的意識としての「本来的自己」の自覚、崇高の感情における各人の「超感性的使命」の自覚についても、カントは当該の著作の中で、主題的に論及している。ただし、彼は、「本来的自己」の自覚や人間の「超感性的使命」の自覚を彼の《自覚の形而上学》のうちに組み入れようとはしない。それは、彼において《自覚の形而上学》が潜在的にしか成立していないからである。

「自覚」ということについて考えるために、右に芭蕉の作品・書簡に言及したのは、日本人の伝統的意識においては、「自覚」といえば、とりわけ審美的自覚が考えられてきたからである。そして、その審美的自覚が審美的求道の極致において成立するものであることが、特に芭蕉においてはつきりと認められるからである。

それに比し、近世・近代のヨーロッパ人の伝統的意識においては、例えばデカルトの形而上学に最も典型的に見られるように、「自覚」といえば、とりわけ自己意識における自覚が考えられてきた。審美的自覚に限らず、「自覚」と「求道」とが表裏を成してきた日本人の伝統的意識におけるのは異なり、ヨーロッパ人の伝統的意識においては、「自覚」は「求道」と

は表裏を成さず、「自覚」の問題は専ら形而上学又は認識論において論及されてきた。ヨーロッパ哲学が現象学を生み出すに至る方向性を、我々は日本人の伝統的意識と対比させて見られたヨーロッパ人の伝統的意識における「自覚」の在り方のうちに垣間見ることもできるであろう。

### 三 《自覚の形而上学》の哲学的意味

カントにおいて、少なくとも潜在的には、《自覚の形而上学》という学問の理念が成立しており、また、《自覚の形而上学》そのものも成立しているということは、彼が超越論的自我「純粹統覚我を、合理的心理学における心霊についての実体論的把握から解放したということでもある。物体については、既にデカルトが、「延長実体」の概念を確立することによって、それをスコラ哲学的な実体論的把握から解放している。誤謬推理論での《自覚の形而上学》の成立によって、形而上学における近代化が完成した、と見なしてもよいであろう。

デカルト学派における身心関係の問題におけるアポリアは、「思维実体」と「延長実体」との実体論的差異性に由来するものである。《自覚の形而上学》によれば、合理的心理学が超越論的自我「純粹統覚我をそれでもって規定し得ると考えてきた諸範疇は、それぞれの実在的人格が己の超越論的自我「超越論的主観（主体）」の在り方を自覚する諸範疇である。デカルト学派において論究の課題とされてきた身心関係の問題は、カント

哲学においては、そのままの形では意味を成さないことになる。

惜しむらくは、カントが『自覚の形而上学』の成立について明確に意識していなかったため、彼は合理的心理学を論駁しながらも、合理的心理学がそれでもって心靈を規定し得ると考えてきた諸範疇が『自覚の形而上学』においてそれぞれの実在的人格が己の超越論的自我「超越論的主観（主体）」の在り方を自覚する範疇として真に有意義なものであるかどうかを検討していない。『自覚の形而上学』が「本来的自己」の自覚の問題にかかわるときには、その検討は不可欠なものとなるであろうが。ただし、カントの『自覚の形而上学』における己自身についての自覚の諸範疇が、M・シェーラー『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』における「倫理的人格」の概念において活用されていることにも、我々は留意しなくてはならない。

#### 四 カント倫理学の学問性

『人倫の形而上学の基礎づけ』が、我々が客観性を見えた倫理学を構築する際、模範とすべきものであることは、確かである。ただし、同書の論述は、濃厚な目的論的色調を帯びている。カントの目的論をどのように評価すべきであるかについては、意見が分かれるであろう。「人格の内なる人間性」という概念は目的論的概念であるが、「人格」に「人間性」が内在しているということは客観的に言い得ることであろうか。カント倫理学もまた、カント自身の世界観・人間観及び彼の実存の背景を

成しているエートスと無関係ではないのである。

『人倫の形而上学の基礎づけ』における難点の一つとして、嘘言論を挙げることができるであろう。カントが同書において列挙している完全義務、不完全義務の実例中の、完全義務の第一の実例と第二の実例とが矛盾する場合もあり得ることは、同書を読めば明らかである。カントの『自覚の形而上学』は、カントの思惟を強力に支配している。彼は実在的人格の倫理的在り方を、各人が「本来的自己」を自覚し「本来的自己」になることであると考えている。カントは諸人格の共同態を、ゲマインシャフト（F・テンニース）と見なそうとはしない。しかし、実際には、諸人格の共同態は、ゲマインシャフト共同社会として存立している。共同社会の内では、カントが実例として挙げているような諸々の完全義務、不完全義務は、有機的連関を成している。完全義務の第二の実例における義務を遂行し得ないで困窮している人が居るとすれば、不完全義務の第四の実例における義務を遂行してその人を救助してくれる人も居るのが、楽天的に社会を見たときの共同社会の実態ではないであろうか。我々は、カントが実例として列挙している二つの完全義務、二つの不完全義務についても、それら全体の相互的連関を考慮して把握しなくてはならないのである。

「神的なものが自然全体を取り囲んでいる」<sup>(13)</sup>という神話的思考法は、近代哲学においては完全に乗り越えられている。しかし、キリスト教的エートスが背後に控えているカント哲学においては、カントは意識してはいなかったにしても、諸人格の共

同態は共同社会として把握されているのである。

## 注

- (1) 引用はアカデミー版「カント全集」によるが、隔字体で記されている箇所にも傍点は施さないこととする。以下、引用のページを記す。A 348.
- (2) A 351.
- (3) A 361.
- (4) A 366.
- (5) A 401.
- (6) 新潮日本古典集成『芭蕉句集』（今栄蔵校注、昭和六十二年、第二刷）、八二―八三ページ。
- (7) 同上書、八二ページ、頭注。
- (8) 新潮日本古典集成『芭蕉文集』（富山奏校注、昭和六十三年、第六刷）、三六ページ。
- (9) 新潮日本古典集成『芭蕉句集』、二二―二九ページ。
- (10) 新潮日本古典集成『芭蕉文集』、一七二ページ。
- (11) 同上書、二〇五ページ。
- (12) マックス・シェラー『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』、Ⅵ「形式主義と人格」、B 第一節「倫理的人格の本質」を見られたい。
- (13) アリストテレス『形而上学』、第十二巻、第八章で用いられている言葉。

(付記) アリストテレス『形而上学』からの引用は、正篇、続篇とも、岩波文庫版の出隆訳による。なお、カントのいう「人格の内なる人間性」については、『自覚の形而上学』におけるのは全く異なり、「人間性」を「人類性」と理解する考えが和辻哲郎『人格と人類性』において提唱されていることを、ここに紹介しておく。

(すずき・ふみたか 愛知教育大学教授)

本誌掲載に際しては、白濱好明氏の御尽力に与った。記して感謝申し上げます。

筆者